

学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性

藤田玲子 山形亜子 竹中肇子

Effectiveness of an English Presentation Course,
as seen in changing student attitudes

Abstract

We aimed to evaluate a course in which students at Tokyo Keizai University learn and practice giving presentations in English as a Foreign Language. We gathered research data by having the students respond to a questionnaire survey and by classroom observation. In this article, we report our research findings and conclusions. Tokyo Keizai University designated the presentation course as a required course for freshmen from 2006. After 3 years of experience and evolution in teaching the course, it was appropriate to assess how the students felt about the course and how well they progress. Our study confirms that the course does offer students an excellent learning opportunity. They show high levels of motivation and independent learning, and they gain confidence in speaking in English in front of an audience, which they themselves value as good preparation for their future careers.

1. はじめに

1.1 英語プレゼンテーション授業導入への流れ

文部科学省は平成15年に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。この「行動計画」¹⁾は、グローバル化していく今日の社会の中で、個々の人間がより確かな情報収集力と情報発信力を身につけることの重要性が増しているという認識に基づき策定されたものである。計画の中では、日本人に求められる英語力として「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」「大学を卒業したら仕事で英語が使える」などの目標が設定され、策定から5年間、小学校から大学まで、様々な試みがなされてきた。しかしながら、顕著な成果が見られなかったことから、平成21年からは「英語教育改革総

学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性

合プラン」が打ち出され²⁾、引き続き英語力強化の取り組みが続いている。英語教育はこれまで既に教養知識としての語学から実際的なコミュニケーションツールへの脱皮を模索してきたが、さらに一歩進んだ教育実践により英語コミュニケーション力のある学生を育てることが求められているということである。

英語コミュニケーション重視の傾向は学校教育の現場に限ったことではない。2008年の小池科研グループによる「企業が求める英語力調査」は、ビジネスの世界でも英語によるコミュニケーション能力が重視されてきていることを具体的な数字で提示している。この調査は国際業務に従事中、あるいはその経験がある総計7354人のビジネスマンを対象にしたものである。この調査結果の中で、特に興味深いのは、約40%の回答者が英語コミュニケーション能力の不足を認識しており、ビジネス交渉の様々な局面においてストレスを感じていることである。さらに、英語での交渉力や説得力に加えてどのような能力が求められているのかという質問に対して、85.1%が「国際的な交渉力を備えたプレゼンテーション能力を持つ」と回答している点である。

このようなビジネス社会のニーズや文部科学省の計画を踏まえ、近年多くの大学が英語カリキュラムの改革を行いつつある。方向性としては、職場で使用できる英語、専攻の学問や研究に使える英語など、英語教育と専門課程を統合したより専門的な英語授業の導入へ動いている例が見られるようになった。このような流れの中で、相当数の大学が英語プレゼンテーションの授業に取り組み始めている。

1.2 東京経済大学の英語カリキュラム

前述のような文部科学省の英語教育の内容強化及び社会的ニーズに沿う形で、東京経済大学は、2006年に経済、経営、現代法学の三学部において大幅な英語カリキュラム改革を行った。これは、「グローバル社会で活躍できる人材育成のための英語教育」を趣旨に掲げたもので、従来の多人数クラスによる、文法、講読中心の授業から、個々の学生の能力を考慮した発信力強化を目指した授業への移行であった。具体的には、以下の二点が大きな特徴である。

- ①プレースメントテストにより習熟度別にクラスを編成し、到達目標を明確化する。
- ②必修英語（2科目8単位）を一年次に集中し、同一科目週2回授業によるインテンシブな教育を行う。

必修英語は大きくふたつに分かれ、ひとつはe-learningの授業、もうひとつが「英語コミュニケーション・英語プレゼンテーション」の発信型の授業である。e-learningは、週1回の教員との対面授業を中心に行われ、発信型授業を進める上で必要不可欠な聞き取り・読み書きの練習、文法知識の習得といった英語の基礎力の補強を目的としている。

必修英語の柱である発信型の授業は、習熟度別の15～18人構成のクラスで行われる。少

人数での週2回授業を行うことによって、受講者と教員間に密接な連携が可能となる。授業内容としては、前期に「英語コミュニケーション」、後期に「英語プレゼンテーション」が設定されている。

受講者は前期の「コミュニケーション」において、英語での基本的な表現、知識としてではなく相互理解のツールとしての英語を発話すること、聞き取るなどを身につける。そして、後期は、自分の意見を論理的に相手に伝える「プレゼンテーション」の訓練を行う。これは、前期において育成された基本的英語コミュニケーション能力を発展させる意味を持つ。

受講者の多くは、中学高校時代に、英語はもちろん日本語でも、自分の意見を聴衆の前で披露し、明確に意思を伝えるという機会を与えられてきていない。それ故、英語プレゼンテーションの授業は、受講者と教員双方にとって大きなチャレンジであるが、同時に2006年度の東京経済大学の英語カリキュラム改革の趣旨である「グローバルに活躍できる人材育成」の実現に最も合致したものだと言えるだろう。

上記の新カリキュラム導入に当たっては、授業開始前のFDで大まかな目標設定や授業のモデルプランが提示された。また各学期末のFDでは教員同士での実践報告や意見交換も行われてきたが、方法論については、学校全体で統一されたものは確立されていない。特にプレゼンテーションの授業に関しては、有効な教材や教授法についてはまだ研究が十分ではなく情報も少ない中、有効な授業内容を目指して各教員が独自に努力を重ねている。

このような新カリキュラムの中で3年間授業実践を重ねてきた今、プレゼンテーションの授業の意義を確認する意味で、現状分析をする必要性が出てきた。

2. 本研究の目的

本研究では英語プレゼンテーションの授業を受けた大学生の事前事後の意識調査をし、どのような効果があったのかを検証する。従来のプレゼンテーションに関する先行研究を概観したところ、その多くは実践報告である。授業内容や方法、スキル、環境デザイン、また事後に行ったアンケート結果などについて報告されている（牧野2003、飯田2000）。そこには、学生の満足度の高さ、英語力とプレゼンテーションスキルのバランスの問題、学生が長期的且つ包括的に学習できるカリキュラム設定の必要性などが述べられている。

筆者は、上記のような実践報告から一歩踏み出して、授業中の学生のプレゼンテーションに対する取り組みを観察し、アンケートによって数字に表れた意識の変化を報告する。この授業にどのような意義があり、学生は授業体験をどのように捉えているのかを調査しつつ、プレゼンテーションの授業の実践報告とその有用性、大学教育における妥当性についての検証を試みたい。

3. データについて

筆者三名が担当した経済学部・経営学部の英語プレゼンテーションの4クラスでアンケート調査及び観察を行った。アンケートの質問項目は3年間の授業実践の中から、必要または知りたいと思われた事柄をもとに筆者が作成したものである。コースは秋学期の半期、週2回90分授業で一年生の必修である。トータルの授業数は平均26回(13週)であった。各クラスの人数は17名で、研究対象クラスのレベルはプレースメントテストによって振り分けられており、中級レベルが3つ、初級レベルが1つである。被験者の合計人数は68名である。1回目の授業で学生にアンケートを行い、学生の英語力やバックグラウンド、プレゼンテーションの経験や、プレゼンテーションに関する意識を調査して集計した。授業期間中は、学生の取り組み、態度、また学生が抱える困難な点などについて、教員による観察を行った。また随時学生に授業や各プレゼンテーションに対する感想を自由にコメントしてもらった。コース終了時、最終授業で事後アンケートを行い、事前アンケート結果と比較分析をおこなった。同時に、個々の教員の観察内容をまとめ考察した。

4. 授業の実践

4.1 教材

教材は南雲堂フェニックスの *Prepare Your Speech* を使用した。このテキストは2006年度の授業実践結果を踏まえて、筆者を含む担当教員が共同で開発したものである。様々なアクティビティーや練習問題は、筆者達の実際のプレゼンテーションの授業実践の中から生まれたものである。14ユニットから構成されており、巻頭にはプレゼンテーションの概要の説明と実際のプレゼンテーションで役立つ表現集がまとめてある。

教材の特長の第一点は、幅広い学習者による使用が可能なことである。従来のプレゼンテーション用テキストには、英語のレベルが比較的高い学習者に向けたものが多かった。しかし、プレゼンテーション授業を必修にした場合、参加する学習者の英語レベルや意欲にはかなりのばらつきが出る。そこで、英語のレベルがそれほど高くない、あるいは英語に苦手意識を持っている学生も抵抗なく利用できるように、指示や説明などに随時日本語を使用した。また、プレゼンテーションのトピックも、自己紹介などの身近なものから、臓器移植などの社会問題まで、幅広いものを扱った。ユニット配列は難易度順になっており、目標や時間数、学生のレベルに応じてユニットを選べるように作られている。

二点目の特長は、スピーチの原稿を書く過程に焦点を当てたことである。各ユニットには、原稿のテンプレートやサンプル原稿を載せている。例に従って、繰り返し一定量の英語の原

稿を書くことで、パラグラフライティングの概念やスキル、自分の言いたいことを論理的に表現する能力が身につくことを目標にしている。

4.2 授業内容とその方法

各教員は、テキストの14のユニットの中から、学生のレベルや興味に応じてトピックを選び、半期約26回の授業で4~5回のプレゼンテーションを学生に課した。本研究観察を行った2008年度の授業で筆者が扱ったものをまとめると、About Myself (自己紹介), My Hero (尊敬する人物についてのスピーチ), Talking about the Future (未来の自分や社会についてのスピーチ), Giving Instructions (手順の説明), Promoting Places or Products (商品や場所の紹介), Comparing Two Things (二つのものの共通点や相違点を述べる), Describing Graphs (グラフの説明), Advantages and Disadvantages (ある事柄について利点と欠点を述べる), Comparing Two Rival Companies (リサーチデータをもとに二つの企業を比較する)である。

各トピックに対して約5回の授業を割り当て以下のように授業を進めた。

1~2時限目：導入，プレゼンテーションを目指したインプット（トピックの関連語彙の学習，サンプルパラグラフ・関連記事のリスニングやリーディング）。

3~4時限目：プレゼンテーション原稿の作成と学生同士の peer editing。教員による添削。身体スキルと音声スキルの学習や visual aids の指導。

5時限目：発表と学生同士の peer evaluation。教員による評価。

必要に応じてプレゼンテーションを録画し、授業内でフィードバックとして使用した。また、他のクラスとプレゼンテーション時に学生や教員による相互参観を行う場合もあった。

4.3 評価方法

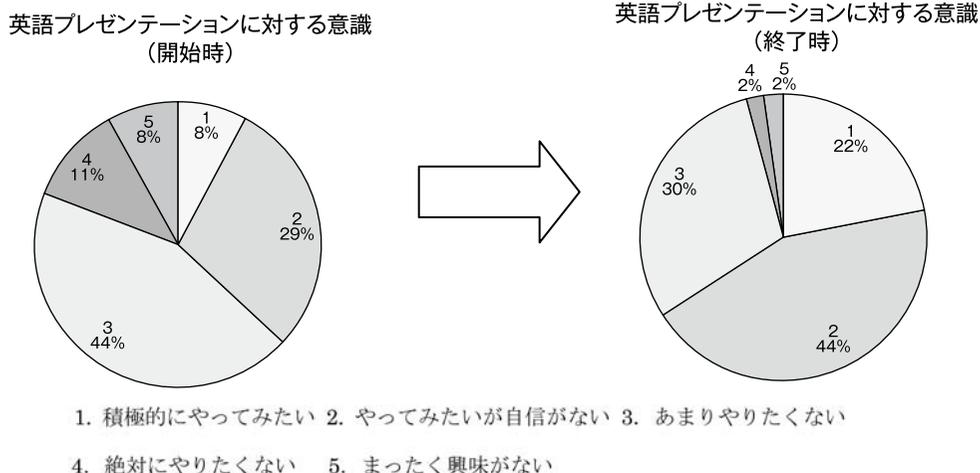
各プレゼンテーションは、voice, gesture, posture, eye contact, contents, visual aids などの項目について学生同士で相互に評価した。互いに評価し合うことにより、情報を受信する能力の向上はもとより、自分のプレゼンテーションの参考にすることを目的とした。教員は、プレゼンテーションの質的評価を中心に、授業参加度などを踏まえて最終的な成績評価を出した。

5. アンケート結果と考察

5.1 アンケート結果分析

事前事後のアンケートを集計し分析した結果、今後の授業の参考になるようなデータが得られた。

図表 1 英語プレゼンテーションに対する事前事後の意識変化



5.1.1 意識の変化

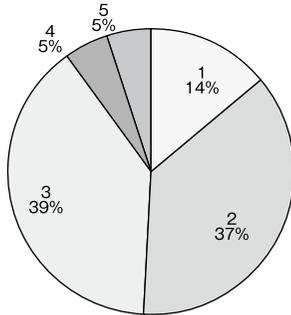
まず、事前アンケート結果からわかることは、大学入学以前に日本語または英語でプレゼンテーションを行った経験のある学生が非常に少なく1割程度しかいないこと、英語で行った経験のある者はほぼ皆無に等しいということである。英語でプレゼンテーションを行うことに関しては、「積極的にやってみよう (8%)」という学生は一割に満たなかった (図表 1)。「やってみたいが自信がない (29%)」、「余りやりたくない (44%)」という学生が全体の約4分の3を占め、「絶対にやりたくない (11%)」「興味がない (8%)」と感じている学生は約2割であった。英語でプレゼンテーションを行うことに関して、自信のなさや消極的な意識がうかがえる。

コース終了後の英語プレゼンテーションに対する意識は、「積極的にやってみよう」受講生が事前の8%から22%へと大幅な上昇を示した。開始前の「余りやりたくない (44%)」は終了時には「やってみたいが自信がない (44%)」へ変化した。開始時には「絶対にやりたくない」「全く興味がない」はそれぞれ11%、8%、合計19%であったが、終了時には「絶対にやりたくない」「全く興味がない」はそれぞれ2%、合計4%と激減した (図表 1)。英語プレゼンテーションという未知の分野の経験を積むことで、学生は自信をつけ、自分にもできるという意識を持つようになったと考えられる。興味深いことに、英語だけでなく日本語のプレゼンテーションに関する意識も並行して高まり、「積極的にやってみよう」学生が開始時の14%から終了時には38%に激増している (図表 2)。英語でのプレゼンテーションによって得た達成感が、日本語プレゼンテーションへの興味へとつながったと考えられる。

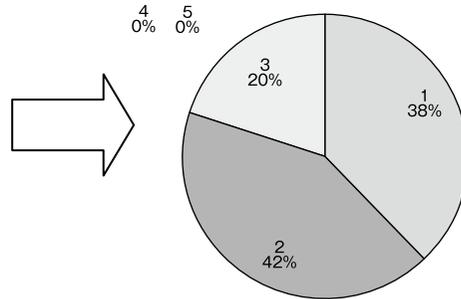
また英語に対する意識をみると、コース開始前は「好き」7%、「どちらかというが好き」

図表2 日本語プレゼンテーションに対する事前事後の意識変化

日本語プレゼンテーションに対する意識(開始時)



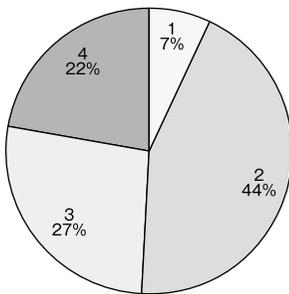
日本語プレゼンテーションに対する意識(終了時)



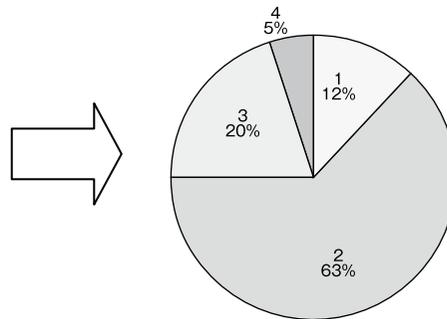
1. 積極的にやってみたい 2. やってみたいが自信がない
3. あまりやりたくない 4. 絶対にやりたくない 5. まったく興味がない

図表3 英語に対する意識

英語に対する意識(開始時)



英語に対する意識(終了時)



- 現在 1. 英語が好き 2. どちらかというが好き 3. どちらかというと嫌い 4. 嫌い

44% に対し、終了後は「好き」12%、「どちらかというが好き」63%と、英語に対する好感度も大幅に上昇した(図表3)。

5.1.2 コース内容に対する学生の反応・評価

終了時アンケートでは、コースの中で一番興味深かったトピックとして、My Hero, Giving Instructions, Promoting Places or Products, Comparing Two Rival Companies が多く挙げられた。各プレゼンテーションにおいては、受講者が発表者に対しコメントを書いたり、評価を与えたりする作業を行ったが、この peer evaluation に関しては、ほぼ全員が「有意義」、「どちらかというと有意義」であったと回答し、その理由としては「自分の参考になった」、「人の話を聞く力を養えた」などの意見が多かった。

プレゼンテーションの授業を通して、身に付いた事項としては、受講者の7割以上が「聞

く力」, 「読む力」, 「書く力」, 「身体スキル (アイコンタクト, ジェスチャー等)」を挙げている。さらに, 8割以上の学生は「話す力」, 「文章構成力」, 「人前で話す自信」, 「音声面でのスキル (発音・イントネーションなど)」と回答した。中でも最も身に付いたと感じた事項としては, 「人前で話す自信」が一番多く挙げられた。コース開始前のアンケートでは, 身に付くことを期待しているスキルとして, 「読む力」, 「書く力」, 「文章構成力」などは期待度が高いものではなかったが, 実際にコースを受講して, 期待していた以上のスキルを身につけることができたという結果が示された。

コースに対しては80%が「有意義であった」と感じ, 「どちらかというと有意義」と感じた受講者が20%, 「あまり有意義でない」, 又は「全く有意義でない」と感じた受講生は皆無であった。この結果から, 学生のこの授業に対する満足度はかなり高いといえよう。有意義であった理由としては, 「英語が好きになった」「スピーチを練習する機会になった」「能力が向上した」「参加度の高い授業だった」「よい経験だった」等が挙げられている。また, 終了後のアンケートでは, 97%の学生が「英語プレゼンテーションの授業は大学において必要である」, また, 93%の学生が「将来役に立つ」と評価している。

6. 観察内容

授業の中では, 取り組みの様子や態度, スキルの学習, 授業内容への反応などに関して様々なことが観察された。

6.1 態度の変化

初回のプレゼンテーションが終わったところで, すでに高い割合の受講者が「緊張した」という意見とともに「またやりたい」という意欲を示した。元々人前で話すことが得意な学生は「自分の特質を生かした」という達成感を感じ, 一方得意でない学生もその多くが「やってみればできないことはない」という感覚を持ったということが, 学生からのコメントに伺える。

上記のような反応は, 自分が発表するだけではなく, 自分と同じレベルの英語スキルを持った受講者と原稿を書く段階で peer editing をし, お互いの発表を聞き, 評価し合う中から生じたものである。コメントからは, 学生が様々な過程の中で, プレゼンテーションに苦勞しているのは自分だけではないと感じ, 他の学習者の工夫や努力に刺激を受けている様子が伺えた。また, 始めは英語でプレゼンテーションを行うということに自信がない学生が多かったが, 実際にやってみるとできたという成功体験が達成感を呼び, 次の回へのより良い成果へとつながる様子が観察された。

回を重ね, 教師や他の受講者からの刺激を受ける中で, 次第に学生は自分自身でよりよい

プレゼンテーションをするためにはどうしたらよいかということを考えるようになり、そのための努力をするようになった。繰り返し音読の練習をする、話す内容を暗記するなど、授業時間外の努力をする学生も多く見受けられた。

6.2 学習意欲の向上

学生の意欲を刺激するものとして、プレゼンテーションのビデオ録画及び録画映像の見直しは効果的であった。自分が英語を使ってスピーチしている姿を初めて第三者的な視点から見ることによって、自分の話し方の癖や、他人からはどう見えるのかを学ぶことで、それを改善していこうという意欲を持つようになる傾向が見受けられた。

学生の取り組む意欲を高める方法としてもうひとつ試みられたのは、個人でのプレゼンテーションに加えてグループプレゼンテーションを実施することだった。結果としてこれは、人前で話すことに苦手意識を持つ学生の不安感を軽減するのに役立ち、学習者同士の連帯感を生んで、クラス内の雰囲気の活性化にもつながった。

さらに、学生がプレゼンテーションに慣れたところで、クラスの外部からの参観者を迎えたり、同種類の授業をやっている他クラスとの交流を行ったりしたが、これも学生に新たな刺激を与えるのに役立った。普段と違う聴衆に話すことで、余計に緊張してしまう学生もいたが、いつもよりも熱心に取り組む姿勢も多く見られ、緊張しながらも初めて対面する聴衆にプレゼンテーションができたことで、さらなる自信をつける学生も多く見受けられた。

6.3 四技能への影響

次にスキルアップの過程についての観察事項を確認してみたい。「トピックについての学習→原稿制作→発表」という作業に繰り返し取り組むことによって、学生は手順を理解し英語の四技能を伸ばしていった。

6.3.1 書く力・読む力

教科書の各ユニットにはテンプレートやサンプル原稿を載せ、学生がプレゼンテーションの原稿を書く際の参考にしてもらった。その場合サンプル原稿の構成を分析し、それぞれのパラグラフに何が書かれているか、パラグラフはどのようにつながっているかの説明をすることが、書くことが苦手な学生にとっては大きな助けになったようである。最初のうちは全員が同じテンプレートやサンプル原稿の助けを借りて、細部の情報だけが異なる似通った原稿を書いていたが、次第に同じテンプレートを使ってもそれぞれの学生の個性が出るようになった。さらにコースが進むにつれて、テンプレートに頼らず自分自身で構成や言い方を考えて発表する学生も出てきた。

そして、頻繁に英文で原稿を作るという作業は、書く力と同時に読む力を養成する機会を学生に与えている。自分の考えをまとめて原稿を書くためには、様々な情報を頭に入れそれ

を取捨選択することが必要になってくる。テキストには各ユニットでとりあげるトピックに関して、知識を補填するための記事や論説が掲載されており、学生はそれらを読むことで読解の練習をするが、同時に授業外でも原稿作成に必要なリサーチをする中で多くの英文に触れることになる。また、自分の書いた原稿を推敲したり、peer editingにおいて他の学習者の原稿をチェックすることによって、内容を意識しながら熱心に英文を読むという訓練もできる。

6.3.2 話す力

話す力に関しても、確実な上達が見られた。当初は原稿に目を落としたまま発表する学生が多く、文の区切り方などを教員から助言することが多かったが、次第にアイコンタクトのタイミングや文の区切り方に自然に気づくようになってきた。最終的には、少数の学生を除いては、アイコンタクトやジェスチャーを入れ、余裕のある表情で話せるようになった。また、専門的で難しそうだとと思われる単語をあらかじめ黒板に書き出したり、話の途中でそれらの単語の意味の日本語訳を入れたりして、聞き手をサポートしようと努力する学生も出てきた。

話し方に余裕が出てくると、徐々に聴衆との間に簡単な質疑応答のやりとりも増えてきた。さらにいくつかのクラスでは、グループを作ってその中でお互いのスピーチ内容について話し合う時間を設けることもできた。一方的に話すだけでなく、相手からの反応や意見を口頭で聞くことによって、発表者の達成感や満足度が上がっているようだった。

発表は、回が進むにつれて原稿を読む形から内容を頭に入れて話す形へと移行していった。覚えようと努力する学生が多く見られたが、トピックが難しくなるにつれて発表が長くなるので、すべて頭に入れて話すのは困難なことである。また、英文原稿の内容を思い出すのに必死で、アイコンタクトやジェスチャーがおざなりになってしまう場合もあった。ひとつの打開策として、各発表者に発表の原稿を持ったサポーターをつけ、発表者が言葉に詰まった場面でプロンプターの役割を果たすようにさせた。これにより、発表者に安心感を、サポーターに使命感を与え、学習者同士のコミュニケーションを高める効果が生まれたようだ。

6.3.3 聞く力

テキストの各ユニットではトピックに応じた内容のリスニングセッションが設けられており、対応したCDもついているので、これによって学生は英語の聞き取りを練習することができるが、聞く力の養成により役立っているのは、毎回のプレゼンテーションで実施されたpeer evaluationであろう。これは、聞く側になる学生が、他の学習者の発表の内容や話し方について評価し、コメントをつけるものである。評価コメントを書いたevaluation sheetは、今後の参考や意欲の促進になるように、まとめて発表者に渡される。そのようなシステムの中で、学生たちは無責任に聞き流すのではなく、内容をきちんと把握するために耳を傾けるという機会を与えられる。このような機会を繰り返し与えられることで、学生たちは、教員

が予想しているよりもはるかに注意深く発言の内容を聞き、話し手の態度にも目を配るようになっていく。5.1.2で言及したように学生側もこの peer evaluation を有意義なものとして捉えている。実際、evaluation sheet に書き込まれるコメントが、回を重ねるごとに的確で、発表にとって有用なものが増えていった。

6.4 学習効果

学習効果という観点から興味深かったのは、グラフや表を使ったプレゼンテーションに対する学生たちの反応である。テキストでは、Describing Graphs のユニットでグラフや表のデータについての表現を学び、後の Comparing Two Rival Companies でその表現を生かして各学生が二つの企業について興味のある事項に焦点を当てリサーチし比較するという学習がなされた。ここで学生は、金額や人数や割合など、普段使わない大きな桁の数字や少数、分数を英語で表現しなければならなかったのだが、クラスの中には具体的な数字データを発表することに新鮮さとやりやすさを感じる学生と、データや数字を扱うのは難しいと敬遠してしまう学生がいた。意外なことに、前者にもともとは人前で話すのが苦手なタイプが多く、後者にスタート時点の About Myself や Giving Instructions ではスムーズにプレゼンテーションをしていた、元来人前で話すのが得意なタイプが多かった。前者の感想は、個人的な経験や日常的な事柄を表現するよりも、リサーチによって集めた客観的な情報に基づいて話す方が気持ちの負担が少ないということと、自分の興味のあることをリサーチし発表することにやりがいを感じたということだった。数字の読み方のルールに慣れる練習をし、データを扱うプレゼンテーションで自信をつけた学生が、その後のユニットでの学習がスムーズになっていったケースも見受けられた。Describing Graphs や Comparing Two Rival Companies でやりやすさを感じた学生も、やりづらさを感じた学生も、ともにリサーチデータを英語で発表する学習を、将来に役立つものとして認識しているという点では共通していた。

トピックによってはプレゼンテーションに visual aids を使用するという課題を課した。手書きの表や絵を掲げながら発表するもの、OHC を活用するもの、パワーポイントを使用するものと形態は様々だったが、大部分の学生は効果的な visual aids を見つけたり作成したりすることの難しさを感じるとともに、visual aids を使用することでプレゼンテーションがより魅力的になることを認識したようである。

全体としてみると、コースが進みスキルの上達が見られるにしたがって、プレゼンテーションが得意な学生とそうでない学生の差は縮まっていった。また前述したように、原稿制作から発表にいたる様々な段階で他の学習者との共同作業を行うことがクラスの雰囲気向上させ、そのことが学生の学習に対する取り組み姿勢を強化させていく様子が見て取れた。

7. 考察

以上の授業観察及びアンケート結果は、英語プレゼンテーションの授業が総合的に教育効果のあるコースであることを示唆している。このことを学習における自信と動機付けの観点から考察してみたい。

英語プレゼンテーションの授業においては、学生が未知の分野の経験を積むことで自信をつけ、自分にもできるという意識を持つようになった様子が観察された。つまり、自己に対する態度が良い方向へ変化したということである。自己に対する態度 (Attitude toward Self) は学習効果を上げる上で重要な要素である。Oller, Hudson, and Liu (1977) は、自己に対する評価が高い学生ほどよい結果を出すという研究報告をしている。彼らの研究によると、成功した経験は情意に良い影響を与え、それがポジティブな態度として表れることで、よい成果を生み、その成果はまた情意に良い影響を与える、という双方向性がある (Oller, 1981)。5.1で述べたように、コース終了後に「英語プレゼンテーションを積極的にやりたい」という態度が芽生えたことに加え、授業で一番身に付いたこととして「自信」が挙げられていたことは、授業のプロセスにおいて、このような良い循環が多くの学生の中で行われたことを示唆するものである。

さらに、この自信は学習者の自律した学習へと結びついたと考えられる。プレゼンテーションの授業は、その内容・方法から示されるように、基本的には学習者が自分で作成した原稿をプレゼンテーションするという、学習者個人の独立した作業が要求される。従って、学習者の自律的な取り組みは必須であるが、学生は次第に自主的に授業時間外で努力する姿勢を見せるようになった (6.1 参照)。第二言語習得理論においては、自律した学習態度は学習者の理想的な態度とされ、学習効果に良い影響をもたらす (中田, 1999)。

授業において学習効果に影響を与えうるものとしては、動機づけも重要な要素である。聴衆の前で話すという明確な目標は学習者の強い動機づけとなり、その結果多くの学習者は熱心に授業に取り組むことができた。人前で話すというプレッシャーとプレゼンテーションを成功させたいという気持ちは、ある状況下においてできるようになりたいというインストラメンタルな動機づけ (instrumental motivation) を与える。また聴衆の存在と聴衆からのフィードバックがあることで、学習者の意欲が促進される。さらに、プレゼンテーション後の達成感はそのプレゼンテーションの動機付けにつながる。つまり、動機付けの観点からも効果が期待できる授業形態であるということが出来る。加えて、5.1.1の図表に見られるような日本語によるプレゼンテーションへの興味の波及は、英語プレゼンテーションの授業が学習意欲を促進し、動機付けを生み出していることの論証といえるかもしれない。

上記のとおり、英語プレゼンテーションの授業は総合的には教育効果の高いコースである

と判断してよいと考えるが、改善や注意を要する事項も浮かび上がった。

大きな問題は、英語力とプレゼンテーションスキルのバランスである。本コースの目的は、英語習得と同時に、プレゼンテーションの経験を通じて、言語（英語）で自分を表現することに慣れ、自信をつけさせるということである。そのために教員は書く作業の指導や、話し方や声の出し方、体の使い方などを含めた聞き手に対するメッセージの伝え方の指導を行う。しかし、今までに日本語でもプレゼンテーションを経験したことがない学生たちを指導するにあたっては、どうしてもある程度の回数の発表をこなして、メッセージの伝え方や自信を身につけてもらう方に重心が傾きがちになる。英語力の上達に向けた指導は、その時間的制約上、不十分になってしまう。

特に問題として挙げられるのは、文法力の定着である。実際にアンケートでも、授業が特にスピーキングとライティングの向上に有効であったという意見が顕著である一方で、英語力の土台となる文法については、あまり身につける機会がなかったという回答が多く見られた。教員は、学生が書いた原稿を読んで添削の作業を行う。その際、添削における訂正や改良が何故必要なのかを教員が説明し、その説明に学生が納得するという一対一のやり取りが複数回あることが望ましい。このような作業は学生の文法力や文章構成力養成の一助となるからである。しかし、週二回の授業ペースでも、物理的にはこれらの実現は難しい。実際は、発表前の原稿添削作業は2回が限度であり、一対一での指導は1回程度になってしまう。教員側としては文法や文章構成力の指導の不十分さにジレンマを抱えることになる。この部分を補う方法として、原稿において、間違いの多かった用語や構文を教員がリストアップし、クラス全体に提示することや、さらに、そのリストを利用して、文章の再構成をグループアクティビティーやペアワークの中で行わせることなどが考えられる。

リスニングに関しても、プレゼンテーション当日に他の学習者の英語を聞くことが主な学習活動となってしまう、不十分さは否めない。リスニング力をより伸ばすためには、よりナチュラルな英語の音のインプットを教員が意識的にアクティビティーとして継続的に取り入れる必要が生じる。過去の有名なスピーチを聞かせ、シャドーイングを行うなどは有用な活動であろう。

スピーキングに関しては、プレゼンテーションは原稿ではなく聴衆を見ながらアピールすることが重要なので、最終的には学生には内容を頭に入れて話すように指導したい。しかし、英語力が十分ではない場合、とにかく英文を頭に入れて間違えないように話すということに集中してしまう場合もある。その結果、アイコンタクトやジェスチャーなどの身体的なスキルの要素が満たされなくなってしまうという現象も生じる。暗記をどこまでさせるか、内容のみ把握して原稿を適宜見ながら行うのか、そのあたりのバランスをどう指導していくかは判断が難しい。

さらに、人前で話すことの苦手意識、抵抗感を払拭できない学生に対しての指導や評価の

難しさもまた問題のひとつである。継続的な学習で徐々にスキルや自信をアップさせたとしても、元来のキャラクターを覆すことは容易なことではない。本人は真面目に授業を受けタスクをこなしているにもかかわらず、教員やクラスメートのアドバイスがすぐには生かせず、どうしても発表がうまくいかない学生は少数だが存在する。プレゼンテーションの授業であるから評価はどうしても発表の出来に基づくことになるが、そういった学生のモチベーションを削がないためには、プレゼンテーションに至るまでの過程を評価することも大事である。公正でありながら、学生の意欲向上にも配慮した評価基準の設定をあらかじめ行っておく必要がある。

8. 結び

今回の授業観察及びアンケート調査から浮かび上がってきたのは英語プレゼンテーションの授業は教育効果の高い授業形態であるということである。その理由は、(1) 様々な英語スキルの習得が可能であること、(2) 全体的に動機付け与えやすく効果の高い有意義な授業となる可能性が高いこと、(3) 自信の育成につながる可能性の高い授業であること、(4) 自律した学習を促す授業形態であること、などが挙げられる。アンケート結果においても、学生はこの授業に高い満足度を示し、社会へ出る準備となる授業として高く評価している。これは上記の教育効果の高さを裏付けるものといえよう。

学生を取り巻く社会の環境も刻々と変化している。冒頭の「背景」で述べたように、仕事力の一要素としての英語力、発信能力は現代社会の中では非常に重要であり、社会に出る前に身につけておくべきスキルであることは疑いない。実際にビジネスの場では、「専門分野の話題に関して、論理的な構造を持ったスピーチをする」、「明瞭にプレゼンテーションをする」、「相手の意見も理解しながら、はっきりと自分の視点を展開して議論する」力が要求される(寺内、小池、高田 2008)。これら社会のニーズを踏まえると、英語プレゼンテーションの授業は、特に発信能力を求めるという現代のニーズにマッチしており、社会へ出る準備段階の英語教育として、大学においては適切な授業形態であると言えるだろう。しかしながら、考察のセクションで示したようにその教授法、評価法など、まだ改善や検討を要する事項は少なくない。今回明らかになった課題の解決に取り組み、より効果的な授業展開方法を示すことを今後の展望としたい。

注

- 1) 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画(概要版)」
(www.mext.go.jp/a_menu/houdou/15/03/03033104.pdf) 2009年4月4日閲覧
- 2) 文部科学省事業評価書事業評価結果

(www.mext.go.jp/a_menu/houdou/15/03/03033104.pdf) 2009年4月4日閲覧

上記行動計画においては小学校を中心に全体的には英語力の向上がみられたものの、中学3年生は前年度の結果を下回るなど、更なる改善の必要性が示された。この成果を踏まえ、新たに策定されたプランで、小学校での外国語活動の必修化に向けての取り組みなどが盛り込まれている。

付記：

本論文を、東京経済大学における英語プレゼンテーション授業の導入および実践に献身され本年(2009年)3月逝去された野村啓治准教授に、感謝と哀悼の意を持って捧げます。

References

- Ellis, R. (1985). *Understanding second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Larsen-Freeman, D., & Long, M. (1991). *An introduction to second language acquisition research*. (pp. 153-219). London: Longman.
- Oller, J., Jr. (1981). Research on the measurements of affective variable: Some remaining question. *New dimensions in second language acquisition research* (pp. 14-17). Rowley, MA: Newbury House.
- Oller, J., Hudson, A., and Liu, P. (1977). Attitudes and attained proficiency in ESL: A sociolinguistic study of native speakers of Chinese in the United states. *Language learning*, 27 (1), pp 1-27.
- Richard-Amato, P. (2003) *Making it Happen- From interactive to participatory language teaching*. White Plains: Pearson Education.
- Skehan, P. (1989). *Individual differences in second-language learning*. London: Edward Arnold.
- 飯田朝子 (2000) 「英語教育におけるプレゼンテーションの指導について 一慶應義塾大学経済学部 Study skills 2000 のケースから」慶應義塾大学大学院 文学研究科 英米文学専攻 『コロキア』 第21号, pp. 49-60.
- 伊原巧 (2005) 『コミュニケーションのための英語教育研究』現代図書
- 竹中, 池尾, 藤田, 柳瀬, 山形 (2008) 『Prepare Your Speech』南雲堂フェニックス
- 寺内一 (2005) 『ビジネス系大学の英語教育イノベーション』白桃書房
- 寺内, 小池, 高田 (2008) 企業が求める英語力調査 平成16年度～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 第二言語習得研究を基盤とする小, 中, 高, 大の連携をはかる英語教育の先導的基盤研究 研究成果報告書, pp. 447-476.
- 中田賀之 (1999) 『言語学習モチベーション 一理論と実践』リーベル出版
- 野村啓治 (2006) A Study for the Development of Oral Communication Skills with Cross-Cultural Awareness. コミュニケーション科学 第24号 pp 141-174. 東京経済大学コミュニケーション学会
- 牧野由香里 (2003) 「プレゼンテーションにおける自律的学習のための学習環境デザイン」日本教育工学学会論文誌・日本教育工学雑誌 27 (3), pp. 325-335.

学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性

Appendix 1 (講座開始時アンケート)

プレゼンテーションに関する意識アンケート (講座開始時実施)

学部 _____ 学科 _____ 氏名 _____

プレゼンテーションとは、特定のトピックについて、自分の持っている情報や意見を、人前で、理解してもらえるように発表することです。その能力の育成を目指す講座を開始するにあたって、よりよい授業内容の考案のためにアンケートを行いたいと思います。ご協力下さい。(アンケートの回答は成績には全く関係ありませんので、感じるままを記入してください。)

1. 過去にプレゼンテーション (弁論大会などのスピーチを含む) の経験はありますか。

中学で ① ある () 年生の時 (英語・日本語) で
テーマ ()

② ない

高校で ① ある () 年生の時 (英語・日本語) で
テーマ ()

② ない

2. 現時点で、プレゼンテーションに対してどのような意識を持っていますか。日本語でする場合と英語でする場合の両方で答えて下さい。

英語でのプレゼンテーションを

- a. 積極的にやってみたい
- b. やってみたいが自信がない
- c. あまりやりたくない
- d. 絶対にやりたくない
- e. 全く興味がない

日本語でのプレゼンテーションを

- a. 積極的にやってみたい
- b. やってみたいが自信がない
- c. あまりやりたくない
- d. 絶対にやりたくない
- e. 全く興味がない

3. 英語プレゼンテーションの授業は、大学で受ける教育において必要だと思いますか。

① 思う 理由:

② 思わない 理由:

4. この英語プレゼンテーションの授業で何が身につくことを期待していますか。

- | | | |
|-----------|-----|----|
| ① 英語を聞く力 | Yes | No |
| ② 英語を話す力 | Yes | No |
| ③ 英語を読む力 | Yes | No |
| ④ 英語を書く力 | Yes | No |
| ⑤ 文章構成力 | Yes | No |
| ⑥ 人前で話す自信 | Yes | No |
| ⑦ 文法的知識 | Yes | No |

- 英語では ①全く抵抗ない ②多少抵抗がある ③かなり抵抗がある
 日本語では ①全く抵抗ない ②多少抵抗がある ③かなり抵抗がある
8. この授業は：
 ①有意義だった ②どちらかというと有意義だった
 ③あまり有意義ではなかった ④まったく有意義ではなかった
 上記のように答えた理由は何ですか。
 ()
9. プレゼンテーションを行った中で、どのトピックが一番おもしろかったですか。
10. 現時点で、海外に滞在してみたいと思いますか。
 ①とても思う ②どちらかというと思う
 ③あまり思わない ④まったく思わない
 ①または②を選んだ人は、どういう機会で行ってみたいですか。
 a. 旅行 b. 長期留学 c. 語学留学 d. 海外赴任
11. 今回授業で学んだことは、将来のビジネスの場で役に立つと思いますか。
 ①役に立つと思う ②どちらかというと役に立つと思う
 ③あまり役に立つと思わない ④役に立つとはまったく思わない
12. クラスメイト同士で評価しあうことは：
 ①有意義だと思う ②どちらかというと有意義だと思う
 ③あまり有意義だと思わない ④まったく有意義だと思わない
13. 12で①または②を選んだ人は、どのような点で有意義だと思いますか。
 ①自分のプレゼンテーションの参考になった Yes No
 ②人の話をよく聞く力がついた Yes No
 ③コメントをまとめる力がついた Yes No
 ④クラスの雰囲気をよくするのに役立った Yes No
 ⑤その他 ()
14. 将来仕事上、プレゼンテーションをする必要が生じることがあると思いますか？
 ①英語と日本語の両方であると思う ②英語だけならあるかもしれない。
 ③日本語だけならあるかもしれない ④全くないと思う
15. 将来英語を使った仕事をしてみたいと思いますか。
 ①とても思う ②どちらかというと思う ③あまり思わない ④まったく思わない
16. 15で①または②を選んだ人は、職場で英語プレゼンテーションをしてみたいと思いますか。
 ①とても思う ②どちらかというと思う ③あまり思わない ④まったく思わない
17. この授業に関して、自分の反省や感想、授業に対する意見を自由に書いてください。

Thank you for your cooperation.